

青年群、中年群、高齢者群における多軸同心円スケールによる時間的認知に関する検討

奥田裕紀
(金城大学)

はじめに

奥田（2011）は、評定結果の数値化が比較的容易で、結果の処理・分析等に研究者の主観的認知が関与する余地が少ないと思われる多軸同心円スケールを用いて、青年群および高齢者において、現在の自分と0～100歳の各評定対象年齢の自分とが、近い（変化が大きくない、類似性が高い、連続性が高い程度）と思う程度の評定を求めた。しかし、この間の年齢の群については同様な研究は行われておらず、利用可能なデータはなかった。そこで、本研究では、先行研究と同じ多軸同心円スケールを用いて40代の評定者群についてデータを収集し比較を行うこととした。

方法

研究協力者：研究協力者は150名で、中年群（40～49歳）、青年群（19～20歳）、高齢者群（60歳以上）の各年齢群に同数ずつ分けられた。多軸同心円スケール：本研究で用いた同心円スケールは、6つの同心円が描かれ、各同心円に内側から1、0.8、0.6、0.4、0.2、0と表示されたものであった。同心円スケール上には、0度の位置から12の軸が均等に配置されており、各軸の外側には0歳～100歳までの年齢が表示されていた。評定方法：評定者は、各同心円の中心に表示されたものに対して各軸端に示されているものが近いと思う程度が大きいほど、各軸上の1と示された（最も内側の）同心円に近いところに×印をつけ、遠いと思う程度が大きいと思うほど0と示された（最も外側の）同心円に近いところに×印をつけるよう求められた（各軸上に一か所のみ）。評定方法の理解を助け、評定方法について理解していることを確認するために、例を示して評定の練習を行った。その後、現在の自分、10歳、20歳、40歳、60歳、80歳の自分と、各軸に表示された年齢（0～100歳）の自分と近さの評定を行うことを求めた。また、現在、過去、将来の幸福度、満足度、健康度についても評定を求めた。評定値の変換：0と表示された（最も内側の）同心円から各軸上の×印の位置までを測定し、0～1までの値に変換した。1と表示された（最も内側の）同心円上またはそれより内側に×印をつけた場合の評定値は1とし、0と表示された（最も外側の）同心円上またはそれより外側に×印をつけた場合の評定値は0とした。

結果および考察

中年群、青年群、高齢者群において、各評定者の年齢と各評定対象年齢との差異（現在-評定対象年齢差）、および現在と過去あるいは将来の満足度・幸福度・健康度の差異を独立変数、現在-0歳～100歳近さ評定値（各評定者の現在の自分と各評定対象年齢の自分との近さの評定値）を従属変数として、重回帰分析を行った。現在-評定対象年齢差の標準化係数は、中年群は-0.68、青年群は-0.62、高齢者群では-0.69で、各年齢群とも、現在-0歳～100歳近さ評定値に及ぼす、現在-評定対象年齢差の影響が大きいことが示された。

この結果から、中年群においても、青年群、高齢者群と同様、各評定者における現在-0歳～100歳近さ評定値は、各評定者の現在-評定対象年齢差に大きな影響を受けていることが示され、評定者の生涯発達過程における時間的認知を示す指標として有効であることが示唆された。また、本研究の結果中年群においても、青年群、高齢者群と同様、現在-0歳～100歳近さ評定値と現在と過去・将来の満足度・幸福度・健康度の差異との関連は強くないことが示された。

本研究においては、“過去、将来”が、現在からの程度の時間間隔（経過）を示すのか明確に示されていないため、評定者の認知が多様なものとなった

ことが、明確な関連が示されなかった要因の一つである可能性が考えられた。現在-0歳～100歳近さ評定値と同じように、評定対象となる年齢を明確にした場合に、各評定対象年齢における満足度、幸福度等に関する認知がどのように変化するのか等の問題は、今後の検討課題である。

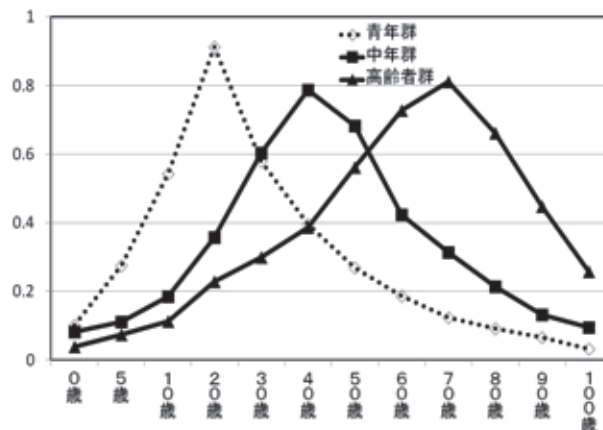


図1 中年群、青年群、高齢者群における現在-0歳～100歳近さ評定平均値